

〈第6章〉教師の共同的な授業研究を通じた授業づくり

第1節 教師の共同的授業づくりによる授業力向上

○通常の授業

通常の授業づくりは、開発→実践→反省→改良を自分ひとりで行っている。

しかし学校の教室は教師を王様とする「小さな王国」とたとえられる。

⇒教師仲間や教師を指導する者たちによる吟味の場合は意図的に設定しないとほぼない。

○授業研究 (lesson study)

開発→実践→反省→改良を個々の教師一人ではなく、教師集団として行う。

⇒自分とは異なった授業観や授業の見方・考え方に触れることができる。

自分一人では見えなかった授業の良いところや悪いところが見える。

○共同的な授業づくりの意義

個々の研究や集団の研究の成果は研究者仲間での内容を吟味され、初めて科学的な成果として受け入れられる。

⇒授業実践における評価においても同じことが言える。

第2節 共同的授業づくりの手順

○研究授業のプロセス

1. 授業研究の組織を作り、授業プランの作成を始める
2. 研究授業の事前の説明と協議を行う
3. 研究授業を実践し、観察する
4. 研究授業について、その成果と課題を授業者と観察者が一緒に検討する
5. 参加者全員が各々自分の授業を見直し、改善していく
6. 授業研究の仲間を増やす、広げる

⇒授業は、授業研究に参加したものの全員で共同的に作り上げられていく。

第3節 授業検討会における授業の見方・考え方

○研究対象の事実の確定

授業研究では、同じ授業を見ているのだから、授業の事実は当然共有していると思いがちである。

⇒授業の科学的研究を阻む大きな要因

授業の事実の確定には、観察者の分析視点、つまり授業の見方・考え方で決まる。

授業を見るときは自分の理想の授業像を重ね、基準としているのである。

○授業研究の注意すべき落とし穴

1. 非建設的な授業研究

無批判な礼賛に終始する「ヨイショ」合戦や、問答無用の独善的批判

⇒自分自身の授業観を客観的に見ることができていない。

2. テクニック重視の授業研究

・ A、B、C氏の批評

教師に求める知識、生徒への話しかけ方、教師のキャラクターなどに焦点があてられる。

⇒目の前の一時間の授業の表面的な改善検討にとどまり、授業の本質が見えていない。

・ D氏の批評

授業のねらいや、社会科としての授業のあり方を問う。

⇒社会科という教科の狙いや、それを実現させるための授業の具体的なあり方を問う。

◆ 授業研究の意義

授業研究に参加し、他人の授業を科学的に分析する訓練を積むことは、自分の授業をより良いものにつなげる。授業研究は教師としての自分自身のために行うものである。そのためにも単なる賛美や独善的な批判に終わるのではなく、社会科とは何か、社会科の授業の本質に迫るような議論が求められている。

